

マタイ25章14節 「各自に任された財産」

1A 神より与えられている財産

1B 創造の源

2B 信仰の量り

2A 清算の時

1B 永遠の報い

2B 報酬の時

3A 求められていること

1B 心のはかりごと

2B 自分の行程

3B 小さな事への忠実

4B 信じる事

本文

マタイによる福音書 25 章を開いてください。私たちの聖書通読の学びが 24 章まで来ましたが、午後礼拝で一節ずつ見ていきます。今朝は、14 節に注目してください。「**天の御国は、旅に出るにあたり、自分のしもべたちを呼んで財産を預ける人のようです。**」

私たちは今、イエス様が弟子たちの質問に答えて、ご自分が戻って来られる時の事について話しておられます。世の終わりについて語られ、そしてその日、その時がいつなのかは、だれも知らないことを語られました。だから、目を覚ましていなさい、また用意していなさいと言われていました。そこでイエス様は、ご自分が戻られた時というのは何をやる時なのかを語られます。それは、「報いを与えられる」時だということです。主人と僕の譬えによって、全ての人が自分のしてきたことに応じて、報いを与えられるということを教えられています。そしてこの譬えでは、それを「主人が預ける財産で、いかに財産運用するか？」ということで説明しています。5タラント受け取った人が、商売をして5タラントもうけ、10 タラントにしました。2タラント受け取った人が、2タラントもうけ4タラントにしました。1タラント受け取った人は、地の中に隠してしまい、そのまま主人に返しました。主人は5タラントのしもべと、2タラントのしもべに同じように褒美をしましたが、1タラントのしもべは外の暗闇に追い出しました。

この譬えは、すべての人がそれぞれに与えられた人生があって、それを神のために用いたのかどうか？ということが、主イエスが戻って来られる時に裁定を受けるということです。

1A 神より与えられている財産

1B 創造の源

私たち人間一人一人にとって、人生というのは「自分の受けている恩恵、恵みにどのように感謝をもって応答しているかどうか」が問われていると思います。全ての人が、あらゆる面で神からの恩恵を受けています。「父はご自分の太陽を悪人にも善人にも上らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからです。(マタイ 5:45)」とイエス様は言われました。どんな人も、太陽によって恩恵を受けていることを知っています。ですから、その恩恵を与えている人が誰だかをよく知らないのに、例えばご飯を食べる前に、日本の人の多くが感謝の思いを表すのに手を合わせますね。そして「いただきます」と言います。けれども、それを造られた方に感謝し、栄光を帰すというのが理にかなっていません。

けれども、その真理を意図的に拒む姿勢は、自分自身に滅びを招いてしまいます。生命線を自ら断ち切ってしまうような行為です。ダニエルが、バビロンのベルシャツアルに対して彼の最期を告げました。「ダニ 5:22-23 その子であるベルシャツアル王よ、あなたはこれらのことをすべて知っていながら、心を低くしませんでした。それどころか、天の主に向かって高ぶり、その宮の器を自分の前に持って来させ、あなたと貴族たちとあなたの側室や侍女たちは、それを使ってぶどう酒を飲みました。あなたは、見ることも、聞くことも、知ることもできない銀、金、青銅、鉄、木、石の神々を賛美しました。しかしあなたの息をその手に握り、あなたのすべての道をご自分のものとされる神を、あなたはほめたたえませんでした。」自分の祖父ネブカドネツアルを通して、天の主がおられることを彼は知っていました。それにも拘らず、彼は意図的にバビロンの神々を賛美しました。しかし、その賛美した息はまさに、自分の手の中にはなく、天の主であられる神の御手の中にあつたのです。そこで使徒パウロは、恵みに応答しないことの不義を次のように説明しています。「ロマ 1:21-23 彼らは神を知っていながら、神を神としてあがめず、感謝もせず、かえってその思いはむなしくなり、その鈍い心は暗くなったのです。彼らは、自分たちは知者であると主張しながら愚かになり、朽ちない神の栄光を、朽ちる人間や、鳥、獣、這うものに似たかたちと替えてしまいました。」そして、あらゆる不義を貪るようになったと説明しています。

人は、自分の源になっている存在、神にその恵みを感謝し、応答するように造られているのです。それで黙示録 14 章では、永遠の福音として、御使いが次のように宣言しているのです。「14:6-7 また私は、もう一人の御使いが中天を飛ぶのを見た。彼は地に住む人々、すなわち、あらゆる国民、部族、言語、民族に宣べ伝えるために、永遠の福音を携えていた。彼は大声で言った。「神を恐れよ。神に栄光を帰せよ。神のさばきの時が来たからだ。天と地と海と水の源を創造した方を礼拝せよ。」天と地と水の源を創造した方であります。

2B 信仰の量り

そして神とキリストを信じた人々の中にも、同じ原理が働いています。いや、神を信じたからこそ、さらに明確にキリストにある恵みを知っている訳で、その恵みに応答するように召されているので

す。パウロは、ロマ 12 章で「神の憐れみによって、自分自身を生ける供え物として捧げなさい。」と勧めていました。神の憐れみを知った人は、その中で神に自分自身を明け渡したいと願います。

それでパウロは勧めています。「12:3 私は、自分に与えられた恵みによって、あなたがた一人ひとりに言います。思うべき限度を超えて思い上がってはいけません。むしろ、神が各自に分け与えてくださった信仰の量りに応じて、慎み深く考えなさい。」神が各自に分け与えてくださった、信仰の量りというものがあります。それぞれが、もちろんイエスを主キリストであることを信じています。けれども、それぞれの信じ方と言いますか、具体的な実際の生活において、その信仰を働かせる度合いが違います。それは、自ずと行いに表れています。本当に自分が信じていることは、そのまま行いに出ています。しかし、それは神の用意された良い行いであって、それでさえもが神の恵みなのです。自分自身が行ったことではなく、神の恵みに反応し、応答したから行っていることです。そして、その信仰の量りはそれぞれ異なっており、その賜物や働きも異なっています。

そして信仰者、キリスト者は、神の恵みに応答するにあたって、神の御国のためにどれだけその賜物を用いることができているのか？という問いがあります。これまでは、自分自身のために、あるいは自分の周りの人々のために生きていたところから、すべてが神とキリストのゆえに自分が存在していることを知った今は、神の国のために生きたいと願います。そして、与えられた賜物に従い仕えます。

2A 清算の時

そして神は、それぞれが応答したことに従って、報いを与えられます。私たち人間はどこかで、「だれにも見られていなくても、自分のしたことに対する報いがある」ということを、誰にも教わることなく与えられています。「お天道様が見ている」という諺が日本語にはありますが、確かに自分よりも上の存在がいないと、そういった恐れは生まれてこないことを知っています。やはり、ここでお天道様ではなく、天を造られた神がおられて、誰が見ていなくても見ているということです。イザヤは、天と地を証人にした神の姿を預言しています。「1:2 天よ、聞け。地も耳を傾けよ。【主】が語られるからだ。「子どもたちはわたしが育てて、大きくした。しかし、彼らはわたしに背いた。」

天と地を造られた神こそが、全てのことを知っておられ、公平に裁くことができます。ヘブル書の著者が、こう言いました。「4:13 神の御前にあらわでない被造物はありません。神の目にはすべてが裸であり、さらけ出されています。この神に対して、私たちは申し開きをするのです。」すべての人に対して申し開きするように定めておられます。この地上で行なったことについて、地上の裁判所には出廷しなかった人であっても、必ず神を裁き司とする、裁きの座の前に人はみな、立つこととなります。

1B 永遠の報い

けれども、多くの人は、神のところに来ません。その理由は、どこかで自分は自分のことを知って

いると思っているからです。自分は自分に対して十分に説明責任ができると思っています。けれども、自分はどこまで公平な判断を自分に対してできるのでしょうか？パウロはロマ書 2 章でその問題を挙げています。他人の悪を見て、それで「ああ、この人は悪いことしているね」と思っても、少し状況を変えて見たら、まさに自分自身が全く同じことを行っています。それで、自分は正しいと思っている人々に、次のように言いました。「ロマ 2:5 あなたは、頑なで悔い改める心がないために、神の正しいさばきが現れる御怒りの日の怒りを、自分のために蓄えています。」主は憐れみ深いのに、自分の罪を認めないので神の御怒りを蓄えていると言っています。「蓄えている」というのが大切に、必ず自分のしたことに対する落とし前があるのだということです。

続けてこう言っています。「2:6-11 神は、一人ひとり、その人の行いに応じて報いられます。忍耐をもって善を行い、栄光と誉れと朽ちないものを求める者には、永遠のいのちを与え、利己的な思いから真理に従わず、不義に従う者には、怒りと憤りを下されます。悪を行うすべての者の上には、ユダヤ人をはじめギリシア人にも、苦難と苦悩が下り、善を行うすべての者には、ユダヤ人をはじめギリシア人にも、栄光と誉れと平和が与えられます。神にはえこひいきがないからです。」正しい報いを神は与えられるのです。

2B 報酬の時

それゆえ、全ての人が神の前に立ち、罪に定められなければいけないのですが、それでも神はその罪をキリストにあって見逃してくださいました。この方を罪人とし、私たちがキリストにあって義と認められるようにしてくださったのです。ですから、行いではなく、信仰によって、神の恵みによって救われるようにしてくださったのです。

けれども、それは自分がキリスト者として行っていることの報いがないということではありません。いや、もっとあります。それは裁かれて罪に定められるということではなく、むしろ逆に、主にあって行ったことに対する報いであり、先ほどは、悪い意味で「お天道様が見ている」という言葉を使いましたが、誰にも目に留められていないものを、天地を造られた神は見ておられて、それに対して報いてくださいます。イエス様が山上の垂訓で、隠れた部屋で祈りなさいであるとか、右の手のしていることは左の手に知られないようにしなさい、というのは、何も全く見えないようにしなさいということではありません。「隠れたところで見られるあなたの父が、あなたに報いてくださいます。(マタイ 6:4)」ということなのです。

主は、ご自分が戻って来られる時に、その報いを携えて来られます。「見よ、わたしは来る。それぞれの行いに応じて報いるために、わたしは報いを携えて来る。(黙示 22:12)」私たちは、主が教会の為に戻って来られることを知っています。その時に、私たちは空中にまで引き上げられて主に会います。そしてどこかの時点で、私たちの行いに報いが与えられるのです。そこでの座を「キリストのさばきの座」と呼ばれますが、パウロがこう書きました。「Ⅱコリ 5:10 私たちはみな、善であれ悪であれ、それぞれ肉体においてした行いに応じて報いを受けるために、キリストのさばきの座

の前に現れなければならないのです。」その時に、それぞれに報酬が与えられます。賞賛が与えられます。これまでの愛の労苦は無駄にならないことを、その時に知らされることでしょう。これが、私たちの奉仕の原動力にならないといけません。

主は、それゆえに試練や困難をも用いられて、信仰を清め、そして報いを与えられます。「I ペテ 1:5-7 あなたがたは、信仰により、神の御力によって守られており、終わりの時に現されるように用意されている救いをいただくのです。そういうわけで、あなたがたは大いに喜んでいます。今しばらくの間、様々な試練の中で悲しまなければならないのですが、試練で試されたあなたがたの信仰は、火で精錬されてもなお朽ちていく金よりも高価であり、イエス・キリストが現れるとき、称賛と栄光と誉れをもたらします。」称賛と栄光と誉れをもたらす、と言っています。試練や困難の中にいる中で祝福は、物がなくなることです。イエス様だけになることです。そういった中で、真実に、主が戻って来られる中の報酬を、信仰の幻の中で見ることができるでしょう。ちょうどステパノが、神の右の座から立ち上げられたイエス様を、殉教の直前に見たように。

3A 求められていること

1B 心のはかりごと

そこで大事なものは、何をもって報われるのか？ということです。私たちは既に、山上の垂訓で偽りの善行であるとか、祈りについて見てきました。人に見せるためのものは、既に報いを受けているから、天に報いは残されていないということです。福音というのは、元々、心にある隠れた思いを神が裁かれることを思い出してください。「ロマ 2:16 私の福音によれば、神のさばきは、神がキリスト・イエスによって、人々の隠された事柄をさばかれるその日に行われるのです。」隠された事柄を裁くのです。ですから、良い行いについても、それがどのような動機なのかが評価の対象になるのです。パウロは言いました、「I コリ 4:5 ですから、主が来られるまでは、何についても先走ってさばいてはいけません。主は、闇に隠れたことも明るみに出し、心の中のはかりごととも明らかにされます。そのときに、神からそれぞれの人に称賛が与えられるのです。」キリストの愛に駆り立てられるかどうか？主に対して行なっているものなのかどうか？純粹に、神から来たものであるからこそ、神がそれを受け取られて、報いを与えられます。

そこで、コリント第一 3 章では、土台の上に建てる家がどんな材料で建てているのかによって、主が来られた時に試されることが書かれています。「I コリ 3:12-13 だれかがこの土台の上に、金、銀、宝石、木、草、藁で家を建てると、それぞれの働きは明らかになります。「その日」がそれを明るみに出すのです。その日は火とともに現れ、この火が、それぞれの働きがどのようなものを試すからです。」主によるものでなれば、それがいかに人目には麗しく見えても、燃えつくされてしまいます。真実なもののみが残るのです。

2B 自分の行程

そして次に大事なものは、自分自身に与えられた務めです。今、読んだところで「それぞれの働き

は明らかになります」とありました。他の誰かではなく、自分自身に与えられた働きです。パウロは、エルサレムに行く途中に、ミレトでエペソの長老を集め、最後の言葉を語りました。その時に彼は、「私が自分の走るべき道のりを走り尽くし、主イエスから受けた、神の恵みの福音を証しする任務を全うできるなら、自分のいのちは少しも惜しいとは思いません。(使徒 20:24)」自分の走るべき道のり、行程です。他の人々の道のりを、私たちは走る必要はないのです。イエス様の譬えには、一タラント、二タラント、五タラントをそれぞれあずかった僕の姿があります。もしかしたら、一タラント受け取ったしもべは、二タラント、五タラントのしもべを羨んだのかもしれませんが。それでも、一タラント与えられているという自覚がなかったのです。他者を見つめることによって、自分に与えられている恵みに盲目になっていたのかもしれませんが。ですから、自分の行程を見つめることです。

3B 小さな事への忠実

そして、報いを受けるのは、「小さな事に忠実」であるということです。五タラントのしもべも、二タラントのしもべも、全く同じ称賛を受けました。「よくやった。良い忠実なしもべだ。おまえはわずかな物に忠実だったから、多くの物を任せよう。主人の喜びをともに喜んでくれ。(マタイ 25:21)」忠実であるということ、そして忠実であるというのは、小さな事がらであります。自分の目の前のことに、忠実でしょうか？小さなことを成し遂げることによって、初めて主はもっと大きなことをお任せになります。私たちがとかく、何か目に見えることから始めたがります。伝道にしても、その人のために祈るのではなく、とにかく説得しようとして失敗していないでしょうか？祈るのです、すると神が相手の心を変えてくださいます。このように、自分のできる小さいことかもしれませんが、けれども主は大きくして下さり、主が戻られる時はその忠実さにしたがって報いてくださるのです。

4B 信じる事

そして最後に、最も大事なことをお教えします。神が報いてくださることを、信じることです。「ヘブル 11:6 信仰がなければ、神に喜ばれることはできません。神に近づく者は、神がおられることと、神がご自分を求める者には報いてくださる方であることを、信じなければならないのです。」神を求める者には報いてくださる方であることを、信じます。もしそれがなければ、元も子もありません。一タラントのしもべの問題は、神への信頼の欠如でした。ひどい方であると主人をみなしていました。そうした不信こそが、私たちが報いから離れてしまう最も大きな過ちです。神が報いてくださる方であること、神は愛しておられること、これから絶対に離れてはいけません。愛しておられることを信じるのです。そうすれば、神は必ず敵を自分の足の下に置いてくださるのを見るのです。

主が戻ってこられます。それは主人が帰って来られる時です。私たちは、そのしもべです。今日の日、今この時を、大事にしましょう。